

天津日高彦波瀲建鵜草葺不合の命の陵のことは、『古事記』に記載が洩れている。『日本書紀』には、「日向の吾平山上の陵にほうむつた」といつている。この「日向」を、日向の国のことと思ひ、『延喜式』の「諸陵式」に、「日向吾平山上の陵は彦波瀲武鸕鷀草葺不合の尊をほうむる。日向の国にある。陵戸はない」と記す。

さて「諸陵式」に「以上神代の三つの陵は、山城国葛野郡田邑の陵の南原にこれをまつる。その兆域は東西一町（約百九メートル）南北一町」とある。

筑紫は大変遠いので、都に近いこの地でまつたということである。

また、『御陵考』（『国書総目録』）には、「御陵考」という名の本が五つのつていいる。いずれをさすのか不明）などにも、やはり日向と考へて記されている。これはむかしから偉い人々が思ひ違ひをしたからであろう。

この御陵は、現在、細川の殿の領している、はるかに遠い肥後の国山鹿郡内の日向村というところにある。

熊本の城下より北に当たつて、六里（十八キロ）ばかりの道のりに山鹿駅というところがある。

この山鹿という駅には結構な温泉があるので、世に湯の町とさえ評判されており、遠近を問わずよく人の知つた駅である。その駅からさらに二里（八キロ）ばかりへだたり、北と思われる方角に日向村はある。

この日向村のうちに吾平山と呼ばれる山がある。この山のふもとのほうに古寺がある。寺号は相良

寺というさうである。

この寺の山号を吾平山という。この吾平山の頂上六、七合目と思われる南の山腹に彦波瀲武鸕鷀草葺不合の命の陵といつて土を盛り立てた古い塚がある。

むかしは大変広い陵でもあつた様子がはつきりとわかる。その形はただ小さい山のようになつていいる。あたりには、松の木がばらばらに立ち並んでいいる。

この陵のうえには、年ごとに注連縄を、幾重にも引いていいる。また汐筒をたくさん積み立ててあるのは、むかしからのしきたりと見え、神々しい。このようなことから、筋目正しく恐れ多い身分の方の陵であるといふことがわかる。

さて、この山の東にあるふもとの寺を吾平山相良寺という。これも、大変珍しく、証拠ともなりうる名である。

また、この寺の本尊として、観世音の像が立つていいる。いつの時代から言ひだしたものか、いまは「御平産の観音」といわれる。みな徒歩で行く。妊婦がこの寺に参詣して、お産の難儀がないようにと誓ひを立てて祈願していいるのは、どう考へたらよひだらうか。

この相良寺からも、安産のお守り札を出していいる。

そもそも、この「御平産」といふことを言ひだしたのは、あの『日本書紀』に「日向の吾平山」と書いてあるのを、文字の音によつて「吾平山」と漢音ふうに読み、この寺の山号としたのが、すつかり里人の耳になしんで、「御平産」といふことだと思つたものであらう。